2　イラクサギンウワバの生態と防除対策

はじめに

ここ数年イラクサギンウワバの発生が全国的にも多くなり、各種野菜に大きな被害をもたらしている。そこで、ウワバ類の発生消長や感受性検定を元に、効果的な防除対策について検討した。

内　容

ウワバ類はチョウ目（Lepidoptera）（日本に5,600種、うち１割が害虫）、ヤガ科（Noctuidae）（日本に1,300種以上）に属する害虫の一群である。ヤガ科には多くの害虫類が含まれており、日本では約190種が害虫として報告されている（農林有害動物・昆虫名鑑、2006）。ウワバ類はヤガ科の中のキンモンウワバガ亜科に属し、多くの種では腹脚の前方の２対を欠いており、シャクトリムシ様の歩き方をするので他のヤガ類と区別しやすい。

主なヤガ類のフェロモントラップによる発生消長は図１のとおりである。イラクサギンウワバは夏から秋にかけて多い傾向にあり、誘引数はハスモンヨトウ以上の場合もある。また2007年のレタス等における被害は９月上～下旬に多く、淡路農業技術センター内の９月中旬の定植７日後のレタス調査では１株当たり６個体以上のウワバ類の寄生が認められた。

2007年11月に南あわじ市のレタスほ場より採集したイラクサギンウワバの薬剤効果は図2のとおりである。検定はキャベツ葉の葉片浸漬法により、１薬剤当たり１区５個体を供試、３反復で行い、死虫率を求めた。

その結果、淡路地域のレタスで使用されている薬剤の多くは十分な防除効果が認められた。一方、同系統のIGR剤やBT剤でも薬剤の種類によっては死虫率の低いものもあり、薬剤の選択には十分な注意が必要と考えられる。また室内検定の特性として、死虫率が高くなる傾向があるため、ほ場での効果試験も継続して実施する必要がある。

今後の方針

今後は他のヤガ類（ハスモンヨトウ、オオタバコガ等）の薬剤感受性にも考慮した、秋期のレタス栽培における効果的な防除方法を確立していく必要がある。

二井　清友（淡路農技セ・農業部）
（問い合わせ先　電話：0799-42-4880）

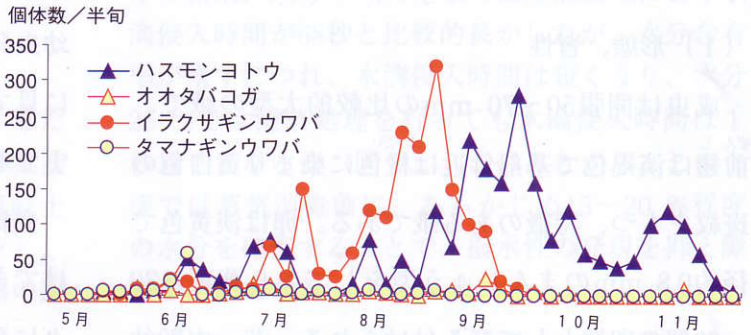

図１ フェロモントラップによるヤガ類の発生消長（淡路農技 2003）

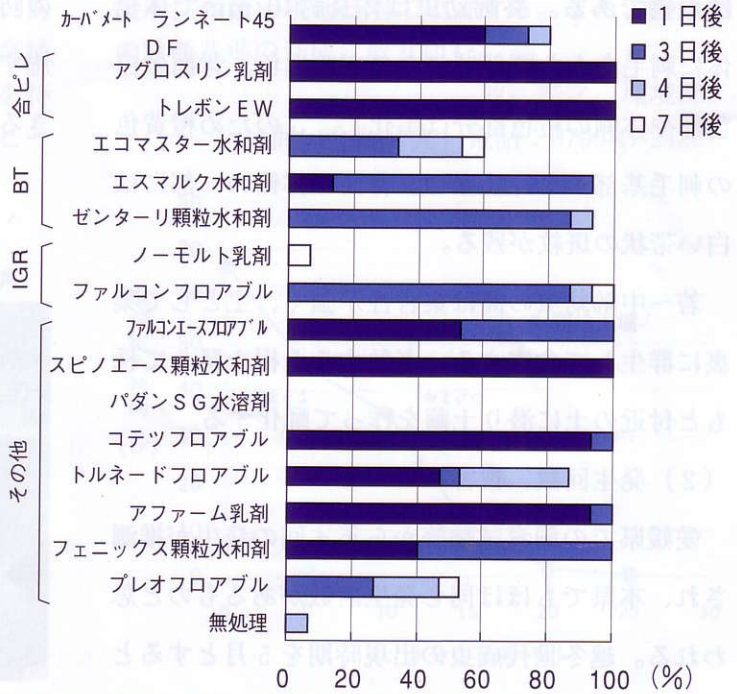

図２　イラクサギンウワバに対する各種薬剤の死虫率